

「エストニアから」日露交流史を見直す

倉田 有佳

4月中旬、エストニアのタルトゥ大学Ene Selart（エネ・セラルト）教授が来函した。タルトゥ大学の前身は17世紀にスウェーデンによって創設されたドルバット大学（ドイツ語で「ドルプト大学」）で、同大学出身者には植物学者マクシモヴィチや在函館ロシア領事館医師アルブレヒトがいる（「会報」第335号（2023年9月号））。

このたびの来日は、先頃タルトゥで出版された自著『エストニアと日本：19世紀から21世紀はじめまでの関係』（エストニア語・英語・日本語の三か国語表記。230×280 mm、280頁）【写真】を紹介することが目的で、函館にはロシア人墓地に眠るМатис Векман（マチス・ヴェクマン。「アスコリド号」の水兵。1866年6月5日没）の墓を自分の目で確かめるために足を運ばれた。

「マチス・ヴェクマンを姓名だけで「エストニア人」と断定できない。バルト・ドイツ人の可能性もある。だが、ロシア帝国時代の海軍将校は貴族階級のバルト・ドイツ人が占め、水兵にはエストニア人が多かったため、ヴェクマンはエストニア人の可能性が高い」、とSelart教授の語り口は手堅い。

『エストニアと日本』は、エストニア県で生まれ育ったバルト・ドイツ人のアダム・ヨハン・フォン・クルゼンシュテルン[ロシア初の世界周航を指揮した]をエストニアと日本の関係の礎を築いた人物であり、「エストニアからの最初の来訪者（1804-1805）」と位置付けている。他方、日本を訪れた最初のエス

トニア人としては、1866年5月4日から6月13日にかけて軍艦「アスコリド号」で長崎、函館、横浜を訪れた水兵ユリ・ユリソン（1832-1899）を挙げている。こうした事情を理解するには、リヴォニアと呼ばれたエストニアの地で13世紀以降移住してきたドイツ人が支配層となっていた歴史を知らねばならない。その手引書として最適なのが『エストニアを知るための59章』（明石書店、2012年）で、同書の編著者の小森宏美氏は上述の『エストニアと日本』のエストニア語から日本語への翻訳者でもある。

Selart教授は、「ロシア艦にはエストニア人が水兵として乗船していたはず。エストニア人の識字率は高く、海軍は読み書きができないと入れなかったから」、とも話す。彼ら日本に来航した「船乗り」、そして日露戦争で捕虜となったエストニア人が日本から家族や地元新聞に送った手記や手紙は、エストニア語新聞に掲載され、日本（人）を知る情報源になったという。

ヴェクマンに関する情報は函館に残されていないが、『ロシア国立海軍文書館所蔵 日本関係史料解説目録』（東京大学史料編纂所、2010年、92、282頁）を手繰ってみると、

ヴェクマンやユリエフが来航した時期に近い1866年6月10日（西暦22日）付で「アスコリド号」艦長が、「箱館でのロシア船への供給のための食糧保有量と、パン及び肉の確保が難しかった」ことを海軍大臣に書簡で伝えていたことがわかった。「エストニアから」の視点で日露交流史を見直してみたい。

（ロシア極東連邦総合大学函館校教授）

